岷江入楚

花宴

第八

特別
へ 12
4604
7

474
N 12
4604
7

宮内庁書陵部図書

三月

十九歳

二月廿余日南殿桜宴事

源氏宰相中将舞春鶯囀以中将舞折花花事

其夜於弘徽殿前右大将君ヲ殿月夜尚侍ニ

取替扇事

翌日後宴事

源氏対面大臣殿ニ沢瀉ヲ

三月廿余日二条右大臣ヲ浩別有藤花宴事

廿日右大臣折藤花送源氏君ニ事

右大臣ハ息男四位廿将為使事

其日源氏着布袴向二条事

始知内ニ通ヒ事

右大臣ハ云ヒ云ヒ

源氏与右大臣ハ云ヒ隔ル恨贈答歌事

小汀文庫

48 3676

△花宴　巻名　巻曰南殿桜宴ト。則花宴ト
大唐ニハ杜丹ヲ称花。日本ハ桜ヲ称花。桜宴ト。花宴ト
花宴例　西北　安元年
新撰四史　弘仁二年二月辛丑ノ条　神泉苑ニ行幸シ
賦詩賜酒有リ。是花宴ノ節始ル此ニ矣。
花宴度々ノ例　雖有ト。長保年例北ノ陣ニ桜ヲ植ル
文徳ノ
源氏　十九歳ノ春ノ頃　高宮　摂政中将　正ニ位ニ
ヒ上　私第ノ宴ノ
(河)
巻名北巻ニ南殿ノ桜宴アリ
南殿桜　紫宸殿
北木殿乃至角ヲ云ヒ大略紫宸殿ノ樹ハ貞観ノ桜ト
ハいつし根ヲ引ヲ前ニ坂上田村麻呂ノ寄動ト
云ヒ伝ヘ枝葉再生シ延喜年間花ヲ開ク
桜樹ヲ伐ラレ焼ケ失ヒ天徳ノ焼ケ失ヒ康保元年

十一月[illegible]同二年正月[illegible]
[illegible]月花宴[illegible]同二重明親王家樹[illegible]京
[illegible]後[illegible]焼[illegible]毎度[illegible]

花宴事

延喜十七年三月[illegible]御記云[illegible]常寧殿有花令宴
頼令次第合一而侍臣唱[illegible]承香殿清涼殿坐北廂[illegible]
織保忠朝臣侍殿上[illegible]施[illegible]大内記理平直 内御
書所勘解由次官 諸蔭橘磨権大掾橘正宗文章
生春風善視扱上[illegible]藤原高樹朝臣令賦春夜翫[illegible]
花絶句 弾琴朝臣高鼓于古同頌 其座理平作
序子二剋 石理平 讀詩 [illegible]給文人御座階
[illegible] 侍臣以下侍 唱[illegible]石倫[illegible]人善行 弾
箏蔵人[illegible]藤原有侍吹 [illegible]笛 [illegible]橘于兼弾琵琶
保忠朝臣時 弾琴吹笛夜深 保忠朝臣御衣侍
臣伯[illegible]朝臣以女[illegible]令賦 侍臣欲不同之数人[illegible]
[illegible]年二月十七日御記日 [illegible]日殿前[illegible]花盛開作石文人

弾琴花宴 昨暮豫令石[illegible]作文人令日遣使石
常陸太守貞[illegible]親王石大臣[illegible]有所煩不奉[illegible]
常陸太守親王奉入同紙作 蔵人立侍[illegible]東[illegible]底[illegible]
二間敷[illegible]四座西三枚於階南黄[illegible]敷為親王納言座
橘樹下 [illegible]座西面為文人座 [illegible]
奉[illegible]着倚子 令石親王藤原朝臣[illegible]
令石文[illegible]文章博士 [illegible]
中[illegible]文 江[illegible]諸蔭侍内御書所 大内記橘正清[illegible]
以下文章[illegible]七人奉入[illegible]
令献頌藤原[illegible]朝臣進[illegible]藤原朝臣座前[illegible]
令書頌目録花房紅蝿[illegible]
繁春日[illegible]作[illegible]為頌文作令探韵字石[illegible]
少将實頼探韵奉上次親王[illegible]文[illegible]探韵 作清平
朝臣[illegible] 在側[illegible]時[illegible]探韵令[illegible]進中座[illegible]
時内蔵寮給酒肴中納言藤原朝臣奉入作令探
題[illegible]後 作石樂[illegible]者[illegible]人時[illegible]奏青竜以助謳

吟及子刻終以取文臺以下流胡床為講師請序作文
人々退侍御下令講其後管弦類奏今詠不止作者
陪大守親王弾箏中納言藤原胡床弾琴及七絃給
親王納言御衣文人給御引出物侍臣退出
度々花宴の中に延長四年仰樹韵以下五人仰云
康保二年三月廿日丙子今日有花宴事乃曲宴
廿七日振東宮殿樹植南殿桜角白砂理根朱檻近桜
頃月之間遂日暮明上達今日留此庭其情其意有
日中及夜半詠古詩誦新歌且以眺望且以愛翫而已
但世間行事具見除記略
于時廿外記大江昌言作陳座御記
同之年二月廿二日御記云今朝立侍子於庭下即殿花
下所親王已卿又移座同樹下色葉紅管行盃酌
京召者手親王令飛所伊尹胡床折花枝王卿以頭
其後延光朝臣仇高丘右今成和歌已刻入内之卿不

退出
拾遺集　天徳三年三月内裏の花宴せさせたまふ
九條右大臣
桜花ちるにしのぶ春かぜのたちかくすみの山もとの
花
世人は幻とのみ思ひなせり仮の世の南殿乃桜
のうんせさせたまふ二条院たちかくれ
ぬるかの花の宴と花びらとあれにしつつ
まつ人と花宴といつれ
こは桜と数ふといとるるに侍りて東宴
るるに不審の宴なれ仏教中の
名月とせしとんなるきさのうんとうく
泉花賞花樹令文人賦詩賜御引出物
乃盃觴人々侍臣
花宴
源氏君八十九歳宰相中将正之
位也

巻名南殿宴

此巻ハ紅葉賀巻ニ次年の事ニ源氏君十九歳ニ成給ふ

花宴例 嵯峨院弘仁二年於紫宸花有花宴事初

南殿花宴例 村上康保二年南殿有花宴

時探韻例 延喜十七年 延長四年 二月十日例

彼花宴有舞楽例 天暦二年三月十二在位 北下れ舞人

をもとゝ常上乃舞ハなりけり

第二月例 弘仁二年 羽花宴始 延長四年 康保元年

南殿橘 紫宸殿 一震殿 異角 凡自草創之樹

自観此樹根自根然萌枝葉再盛坂上陳子奉勅之

延喜御代 群列橘樹東頭

第日常寧殿花宴并時御

天徳焼亡為根櫨 康保元年 正月廿七日 桜樹 親王

十一月又公卿 日四京移之 此後度々焼失 毎度移之

近ノ樹手水後 御所流沸字 已東之木之

南殿花宴 東宮之常寧殿花宴 延喜十七 天慶四

清涼殿花宴 延喜二十七 仁寿殿花宴 天慶四

花宴ノ上ハ殿ニ ノ兎別雖有 宴席ニ用 多ハ多ハ

清涼殿 黒御 有 被行 行孔 公宴ハ南殿 ニ 使

有 今世 世 宴席 清涼殿 行 ハ

人 ハ 第日 世 の花宴 ハ 孔 ハ

[illegible]

[illegible]

乃[illegible]

[illegible]

元勘例 一度の例とやまた世地流のうちに[illegible]

[illegible]元食[illegible]

元桐壺

黄ハ[illegible]
十六行花
書し

后東文乃淳つ乃

筆 后ハ藤本 東文ハ朱雀流し 秘日

后右よりして 筆 音こ淳く 南殿東西し

東宮ハ左東こ后ハ右西ナルへし 年 秘日

まゝの乃ゝ女房 東昇

花ハ[illegible]ハ延喜例としらく清涼殿より[illegible]

[illegible]

ありうゝ事ハ

うゝさてんの女御中文のうゝ

東秘文つりハ文后とこしられる日歴これな物とつへ

[illegible]

日いとうゝ晴ゝ

菜日盛佐れ世ゝ天と云ふ[illegible]花ゝ面義侍ゝ二月末時
節の氣氣三六中の有桜上代の桜と云ふ[illegible]
来代爽云ふ眠[illegible]

眼ん

私曰

私云ふ[illegible]菜の日ゝ[illegible]晴て[illegible]
[illegible]と云ふ以花宴あゝ日[illegible]晴て[illegible]
[illegible]

私文字[illegible]

菜花之中一儒云奉作献題 二献しを 勅令字しし

菜日春夜吹梅花延喜十七梅蟹春日斜 延長に

花樹雲霞深 天慶に付頌し

次云韵字盛中 梅置庭中云文豊云上近衛次特先探
所析韵字二字置吉善昇自清階献し 菜日延長に
年度右近少将 實頼探韵奉上次[illegible]堪屬文者文人等

各進文臺以探一字見て出て官姓名及所探韵字今
菜探韵と云ふ名一字特しとゝく韵字くゝし
端作春日同賦春夜現梅花名ゝ字應製詩 探得 湛字
[illegible]
切韵の時ゝ如此不出頌中取韵ト注ましこと[illegible]
[illegible]力 私韵字と一字[illegible]
[illegible]字
平韵字と[illegible]

夫ケ
以下二字
弄略入
年号行
日アリ

宰相中将春とつゝ文字　保れなす春しの真淳臻韵

花

第四御門栄花の時節よ遊ぶ時とえて春とさとり
えゝゝれゝゝゝ日花の春し
しゝゝ人へ世しの人ゝゝゝたり

弄

つゝゝ乃中将　秘ゝれしさのゝゝゝ猛ハけゝゝしなり

さゝゝれ人ゝ　秘保乃中将のれれ人ゝゝゝ
ゝゝゝかゝゝゝれゝゝゝゝ　秘瞻ゝゝゝゝ

弄

第ゝゝゝと瞻病し第四中宿ノ人紀カ赤ノ女ゝ
ゝゝゝとゝゝゝゝゝ人鼻れゝゝゝゝ
ゝゝ乃人ゝ　北下の文人ゝ
因大蔵上乃人ゝ紀文れゝゝゝゝゝゝゝゝ
れゝゝれ　相壹　朱産ゝゝゝゝ四方天のゝれ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　ゝゝゝ天れ人の文ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
詩れ後自一首作ゝゝゝゝゝゝゝれゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
探勢ゝ面ノ付のゝゝ退ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　秘栄弄ゝ印

弄

延長四年の例
第日　延長四年文章生七人
第花見花宴の例
花宴雅楽例
天暦三年十二月二日花宴陽明門院
第天暦の例
第秘曲

秋養上てよるさいしゝねとうむるんあれこゝのものと
形をれ形ふし舞内
後可し後　第四　秋和御所対面廊と合て御面舞
今清涼殿の御　秋く著催感像を
以伴侍いつゝとゝろとゝ
秋お業賀の時の御のかいふなれい行とゝとゝとある
御花花とつすい
第　舞秋い楽上古い舞あるこ今ふ毛絵
河　舞園こ女形て如市御舞
第羅い御出将東　第十五年　秋栄さ静
第図古左屋ニ八人ノ花しゝふ時あゝしゝ
葬送の時うれと養すゝ　秋御花花人の葬送
よ御ゝ九宗ゝうて出てみれ吾のなあるこ家
なゝゝゝ振柳をいゝゝ
れゝゝ宗ゝ用ゝ　花人蘇生ゝ
すゝゝて　第花ゝ　秋後ゝ比ゝ

かゝ御ゝゝと　秋かゝゝの出ゝ后ゝ
秋ゝて用ゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝ
出ゝゝ面ゝゝゝゝゝゝゝゝ
第勅禄ゝゝ　花　花宴ゝ殿ゝの舞ゝ勅禄ゝ給
ゝゝゝ例ゝ
給御衣例　延喜　延長ゝ
延喜十七年　花宴　保安胡片　賜御衣　法皇　御侍
者数人女装束　給ゝ給
同延長　年　花宴　親王　納言　賜御衣　文人　錦楽　御上
給　年　花宴　年末の　例　花　壹上　年人の　例
上達ゝゝれゝゝ
第四　御所　舞　所　御　小　御所の御
ゝゝ小御中ゝ　弘　各ゝ
ゝゝて　御　上達　及ゝ　朝
ゝゝ　花宴　壹上　舞　例
御所の御ゝ

けちめもみしに　猪目又楊目

ふみすと備ふる事　むかしハ詩とし備ふるとあり
筆花紡と被備ふる呼ハ庭中よりそころ文基とつき
ら佛前へふしそし文人ともいはむ子すみかく　頌頌
するし　筆日詩と作文と云ハ故に紡といふ人ふしはに
文ふすくいふへ
源氏乃君兆心ほとし
筆何佛紡といふと子を男しして心ふすへし　秘曰
おもしとえやしに
筆曰毎句秀逸するゆへに各感するゆへに頌頌中くにも
も拝うね仰し一統河大才の人ハ雜字あり故にみさうね
人々ハ此筆ハ昔ね遠く經句ハ紡人乃詩ハ不て有雜字假
雜字難有く佛前へし頌師恭勤く人とを蔫限え
ニ十八席とうちよふつにされハおやすまるへし
又一ハ頌師もえらみ候うれと云ハあり頌師ハ讀師よ
としつかはしてよむ物なれハいふところ筆ハあるへき文

秀逸と感して是非とゆ決をつけにおいて音成
不叶の者ハ表紙し削る者し
秘云是ハ頌師ともみかおやまるし頌ともすとえ
やねとのすし関去ハ字紙とみやれとさきと〳〵能し
くらに　秘毎句秀逸の数し
かやかうも　秘筆はち兆地し柏つかのみうとく何とて
源氏君とおもし給ひて　や
中宮ハ此兆と見ゆ
まふらいなまさ人とは何とてかくみえて强うとなり筆曰
わかよ思ひし　秘中宮ハ藤つぼなりきこえ女御おほくや
筆曰藤つかの人ふしくしあさきとりきみやと云次の筆
とおりいとくへ稀なし
藤壺中宮
秘大ゆきよ花のすかへとみましうと霞とん兆とかれまして
ちとん坊へとをさせ古とて亦霞すねんを花なとをかうあて
闻みやへとれ物かわしいうつくん〳〵ハ花いさくとしおさなとして
にうかみやくあうへきと露のらくわのうへけんとく流

ゆたかにおほいのあまりて此世中にうらやむ人おほくへしと源の姿
のそこかれたるやうにて人よりかしこきたるいなりけれハ源の
うへとさかへくのうちにもあるを思ひて人をうらやむなり
箋曰花とも花と思はぬ人ハ人のほうをもとめし心なり
不論古業也花よ花とよんて人をも昔営ハまかせし地とも
いふるり露なりね人と花とにとうあるに在はおもひ心より
人のことを悦やハ世上の陽人のこといし大かたはかしく文字
紬力の入ふる不いし古業の身を志るひすくるはいとつよな
しとよし花哉源ハ人せなるとみらくハ前くのましき此
みの綱まて凡合ちくふ事をへし花ときよくむ人と不
思笑文ちをするも知りたくして箋し

弄ノ箋略し

関古人とくとして八陽人と文人とくらふるを二つく事
む躰花とみハ何毎をおしてきし人とかくる所にて伺かくも
れんのうちたりおんすいうくかるまよりん
箋曰箋子の判し源へ贈答よおもうさ源氏よかくまさる

弄
弘キ殿

秘
かやうの所哥ハ人よかくうち猶へたいまゆなかる秘そ所んひとつ
よそあるへきはかとし箋子の説之哥曰

更いてこと心ちかく
定家以て目出帯帰字あり
私云延長四年花宴和記ニ寛二月魁ニ入内侍臣退出と
そのうわれ河ふ散　箋退去
かくらふへきたくら　王命如つかるなるへし　箋同
私あしたり　黙然不有　万葉　志同
なくとおもしとものかくさにてすすと申しるちへおそく
箋秘中くと思ふるうてもも
こそでん　秘相意のもうむひし　漢語抄
かそえの　箋河細殿　兵数て抗　秘抗云席の字とよめり
旧説扇をとひそ文と黙入えもと志ん
之のくら
箋河弘キ殿ニ南小へ細くこ とうちろ之有りえハかり
早之しあつろえんし格子退之くし　秘同

花

秋かりき夜は廊し廊の中この口し
女郎は　秘弘徽殿し
みくのくるしきとも　箋河　くるしきはくるけりける万葉
河くるしきはくるけりける万葉　くるしきとむつし　式はくさき
きと母こしまそるし
秋之わくのくるしきりしてあれそ之の口のきとは各別え
世中のあやまち　秋世のれ人のあやまち成けり流
寄

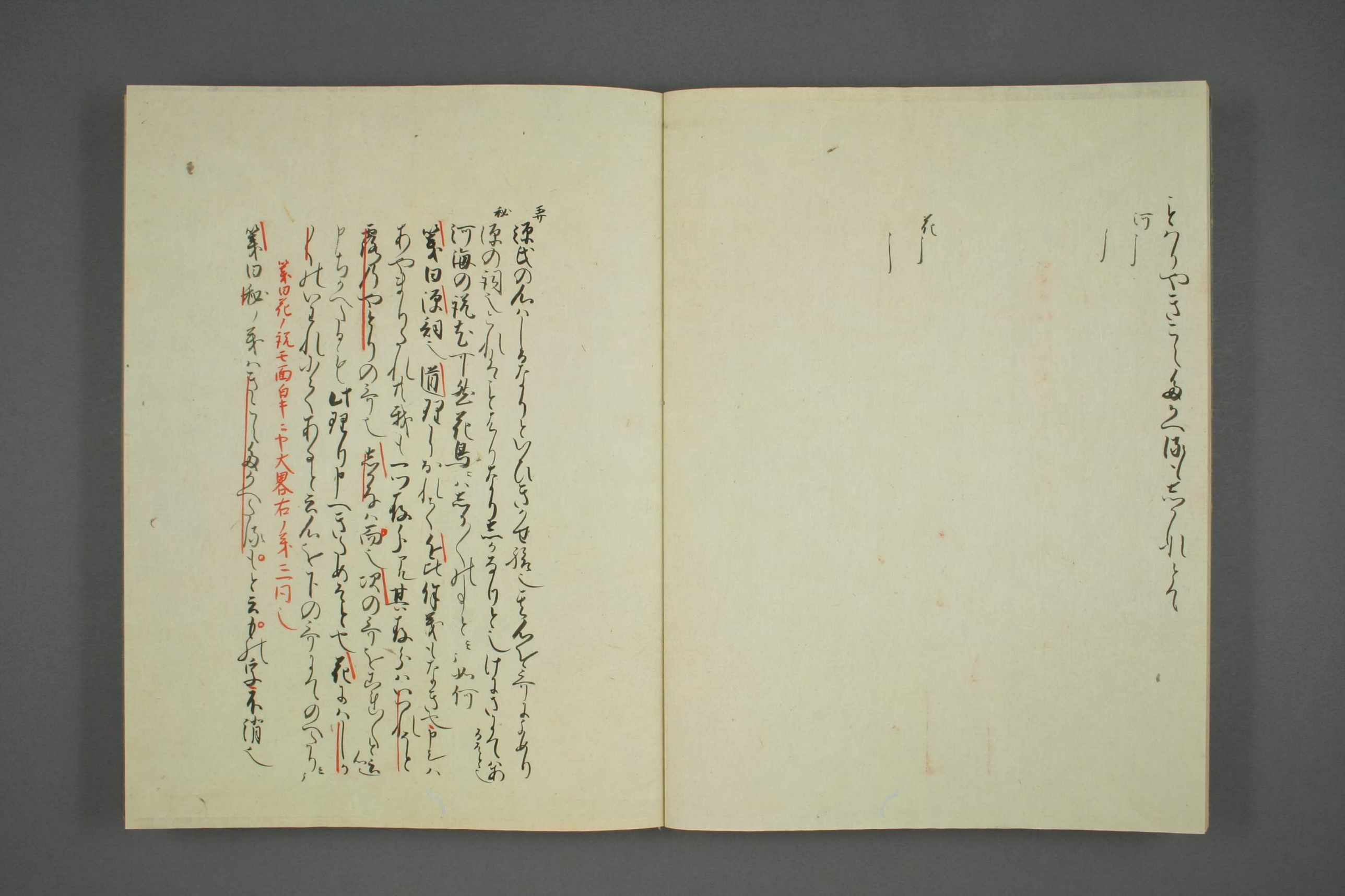
関去るてつくし世のれ中し　きれとし中より従に拂の
ましかくなり
式部口説よし十剣玄面白し諸人のそしいかやかる時
けんまあやまちなきれてし用んよへし
いとねーかーしまとする
さうらし朧月夜れさ海し

おほろ月夜より　箋　秋こそれより別名とし
河てりとせぬくとつもさそてね書おれるおほろ月夜に似る称
偉なり天にたく指そなれこい　已上箋
こもれるさ海よふくる称え
寄
こそさ海よりてあり

箋　秋十かぬ文字清て思　数のしれ之これすへくる称よ
てあるよとし　十剣臭ま母見てより
あれむくつを　朧の剣
帰てとましきい　従の剣
従
あくさ夜のあるれしきてまし入月のおほろやもなしね　秋より
秋
かやりさ思るカケサルハおほろけるしね　秋より二テハキキカトと
日天文八三とい日入月ー　愚案んあるとし　十朧月夜
れも来ときつねえ持は口入月のとさるなきるしぬへし
二月廿日の月入とさんまかなつみなきよしとし
箋日入月とはよしんあるへし月とさ称はみちさくく人

さもあれ此もけふの湯をたゝして入物とそれくに移りゆき
名るとくなさことゝくふ中へかたをさするねをつりかへて
秋之者を夜ひわるれとてすへかたらる月夜うる梅ち
なるやいつるより名より詠せる今ぬつしかろけは
竹縁と果りかなろけるゝねへが縁るゝねし
あさましさにも　勝のさ伝し
こゝよ人小と　勝の詞
まるへさ心人よゆるさい　し　草时の計略し
秘　源の目積よへあるは人よゆるされしけるとへ南三使の計略
よの猪人け人よある後へせしのなあなり
弄　なされぬよしと女よいもんなあり見せ詞し
け君小と　秘さてへ源うりてゆましからと勝のさてもし　草日
まいしと思へる　秘　花より勝の　せてんし
忍いんらや　源へんし
猪るくあさ事くに　素みゝるれあけるさ梅出てし
あはてゝし　何周章　慢　素のうゝれすけるさ梅出

女はましてさ梅くよ思ふみるれけり
草はおもうけに源よ念述猪つるす中又へ素之気をさえ
と伸しれしのめし　さやしの中と母気てし
秋気のへし猪へ　秘　源の詞し
いうくうさに由色さ　秘　何後何としてはかなれてきと
このましてうひもてやみ猪りんとへよもかゝさ犯しと
源のゝよく
うらは身女しやうくさてし見て浮て事かれをはとうしや　以上
弄し
し
し
草曰志行りよ名と尋ゝるて思ふ志のふへしねと思へ
るなしうさ氣ハ素実の志すしはなう紀海すゝしも何
多さて七ヒとよう紀多へてさ中うりしそ名誉の作をし
なれかれきてゝるの猪すしさうて恨るゝし
弄　秘　草　大略同し事し



源氏のんハしらなりといひ猛しきを今よりあり
源の羽しこれをとりなりとしけるさもそ
河海の説也下巻花鳥ハ
第四源羽〳〵道理しらしかく行くに此作家なりを
あやまりしれ称と一つ有ふハ
第四花の説也面白キ二中大界右の年三月
第四椒の年ハ

原本 いつれもと雲のやうとなりましにふちの京より風しきて高き
寄一

秘 河海とうとうとあるに但北こ源氏大臣とハ風しきまし
雲とうもうもうぬとくなるふとし
第雲のやうとうとあるうるふ（ふいもしと深しる意）
第日雲と云物ハ風れ市ぬ紙ハ風とハ或ハ人もあるて
ちする意源氏又ハ人のうしいはくれいる海辺ぬ
（京極と結ぶ北雲のハくしれふくえけうしのと
ハかせしとし 秘こ源とハ大殿ハ同とうるぬ風
風をうしくはあもしあまるぬくるるとを
第日いつれもと云不脹ハ東の紙よ世なれぬ文の
君とありし紙とうし合うくみる（ふくれ

秘 第日女のあるうるふ
第日し紙うみれハ前の方れハ右大臣れ系し一仕
子細なる源
すういまるる女 たくれんしかやうよとてうしうるハ源と
そうう雲ぬしのもうとくしいあるとうるる海
うの御つうる 秘 弘徽殿へなり
あるうをうとうとうしいあるとうる海
秘 女方れうへうく源の生のもし
ぬ

寄一
こうつう 源の内裏もうくのにぎうし

華秋の花宴の後朝なれは人々くなな給ふへし
君とろかなると 秋 やしく給ふしなんし
さしも面みなれき 源のいつく思ひかいしらるるときは
くそいあつふへし

陳さまろひけり 河海
気くとうきはくるし
その孫とえしも中へ源 源の御いつうともうるねかせんやて
わきと寝入るる夜とつくるし
入給ふ 源の寝所へ入給ふへし
女御の御かたも 女ともかとしとしてあるへし
まうい女まうれぬ まうはいきうしやうねまゐるとやや
又六乃君 六は朧月夜也
三條の北の方 秋螢兵部卿宮へまいらすへし
此比ん螢兵部卿の宮と帥みそらや業の文など書ちらす
やとやせらし

以中将のきさあねにの君 右大臣の宮に女は以中将の北の方也
(何日)不旨目奉しまてさあねとはくれなし
人もすなあね様花し 弘もすさめにくるし
皆不かんへきれえもてさむとは承しもて源奉し申はさ
みえすとすけんへし
申しうれなりはかしりとまま
弟し

三條太政大臣 此時はいまた右大臣也

- 弘徽殿大后 此時は女御 朱雀院御母
- 帥之宮北方 帥宮は螢兵部卿宮也 源の内侍也
- 後任大臣北方 後任大臣此時は以中将
- 六君
- 朧月夜尚侍 是は六の君なり
  六ノ君とアレ上人ハ文モ

六月廿六日　第　秋　はし勝月夜し

[illegible]　秋女のさはし

[illegible]　河言[illegible]

[illegible]　第子[illegible]

[illegible]　養上[illegible]

花

弄

第日河ノ流れ[illegible]

花ノ第ノ月

[illegible]　秋　後胡御[illegible]し

[illegible]　第　秋　[illegible]

[illegible]　秋　[illegible]

[illegible]　秋　[illegible]

第　秋　右大臣の女[illegible]　弄月

勝月夜の[illegible]

[illegible]　第　秋　[illegible]

清[illegible]　秋　[illegible]

[illegible]　第　[illegible]

[illegible]の星人　花宴の地[illegible]

参りつるひらとを
ほ信廿將右中れなとよ
右大臣の見し
こきてんのれおぐれ　第壱回うら退あ[illegible]
むれらつれ信　ほのの
ちるる　和　右大臣の字信てとくくし信
こきしとと
くみたるめぬ　和多くの品事しめし
勝のほ信ほのんよあいれ毋れらくみ宮くくの信
さらとてあんけまりてるいそはやみかるしと
多くくるるのよ
なるめるつめつ　ほのさ信し
見ハいまるほの白裏そのを庵相てるそのし
ものあ君いるつをくるるん　を業姫君のし
和上の御りつくと孫ふ信とあるまりり姫君れ

第秘　勝の兄弟ら七

ゆるつ信姫　しし　寿円
見ひらなれハ　姫君とみ信ハらく孫ハ御れ信て
んとるるりつるし　おまを賀まるやるくくハ女ね時な
しなるしめつとたる
うれたるし乃扇ハ

第檜扇　河右松扇の面ニりのうへ数つくとうたやう
るるうみるるるくの系るてるるるまるあるるむれ
に弦いれるるし　ムを　の扇し同しくる数てるむし
を橋のうすや面白く裏業し　和花ノ女ハ　てとあり
られるるを　ニ三業の　のるるくる月とあるるる
第四橋るるものうれ
ま泥殿とるるる月とを
一可三年るるとあるるる青表紙ニハ橋かさ孫ふそとるる
つとを月
凡ハ扇ニ寸ハ寸しめ寸あるを
の扇といろけるるやうまを

十七

清少納言枕草子　な海めしきお前　ふ年かくお前の扇
おへはなねしかはわかわらかくて
和
檜扇ハ持よみくらう他本ニ年かくハとま青表紙
ハ三年の字なる　弄三年ハ三教を引まつしむこ一勘
草のしとはといしは海のくなかう仮へて
和前の勝の氏れまし
らにものなんらこれにぞ　杉し
和源の斂の中に無秀逸し文字殊更妙くそ花鳥よ
系しあらこち所面白し
草　私ノ弟を注ス畧し　草曰明をとてよりハ有明の月
行氷ハいはゆし無ものれさることまへてとハ切来とうし
あはらんし世にものぬハ此歌をも此をとはさま一ねんし
面ハ月をもてふ弟し下の人ハ勝月液雅と無しけに
こち人し無よるねハ無とくハ有明の月の行来たるか
らくとし　此世にもてねハかつらしも世の字乃ハ
そてハ有まし之とし可しるまあふ坂の関ハゆるさ

火炎めしを
弄
寄れ杉ことを
火炎めしう
まかりをとほ
八つもいうめき
もし

しの氏れらしいすゑ中さ承し
む
吉水僧正此氏にも有明の月れゆく来とをみつかそれみ奇れ
此氏とをらてお凡付るし　源氏をは詞とも歌とも
てふむつきし後泳てし源氏みさらん氏よみ去え念
のゆとくて　又花宴まてハとまもく　れらく難ろするま
るうと無中ゆへつる
かさいつ年所ちく　草曰此扇よつさいつ年仮をし
おかい交よ無　秘葵上なり
かく君も　弟秘葵上し
あかね雨なりし　秘不定くるる雨ともなりし
かとこの州をしへ　秘草子説し　かれんのましにそしへ
なきんとある詞とらまくさんやしなかふあなる男かるな
とへるしりるやしよりやあるへしふとし
草物語の評し難しかつしさゆりやおらんとこりと
あくとし後の葵まての形枕出にしつきし扉の詞し

まいのくるしさ　秘まへくはやく涼くもしるし
竹中前のまてなり尺てちり
けるもくれをてみむしまるハさし
気りくや世々のかとれしく俗まちめと見せらくもまち
おかい夜よい　葵上ハる又二條院ともかくしむらん　御わい
夜まし久しき名よるをかきらされと又二條院へ
みとりめよれ　しうくさまく葵上へおかし給まし前よ夜
のゆかと物まうなよありくまさぬるに二条院より大殿へたて
しるまゆとハるまね面白し
花くと　葵の對面しぬ給を優れて花くなるし
さうみれとまさいそうらく
秘
まますもよろしくとりし
やかうにあるめ貴ハうまくちらく
草白乳
草河　催馬楽貴川律にうし
御くのまつ枕ハ浪枕し浪荒くてある貴所なしとことと葵
上のやかうなとぬんさ海ともせらくうひまらせし

弄
花く菜ウタ
只葵の折トけ
ぬハらりて然れ

又
かとくけるら給と次の詞よあるかやさくる葉と貴川乃
秘
曲をとふらよせふらとも　にち草よ及ぶる地移よのちる夜
葵上死んとしいけ給ひねをかほ見し花鳥かやさくる讀
あるとふらもせらくぞまうらとも　はまうくハまふしさいさと
秘葉閔にハかやさくる時へ下絲を鳥の葉を用ひとするに七葉
よ及ふるよしのせうる又ゆる出にかやさくるつうとハみちら
一
山とき化のやさくるつうととうへ気うくみするハ葵れ
又みとうの思をかりしまふしるかうとさ海ふけよねちやするとて
河
いつる後に然をかやさくる葉と合をとりしてみる葉で然え
催馬楽律貴川ねさりよ見せしのやかしふ海くてやりふ
やするよになくるてかやさくるつるかしやト畧ゆし

一日のきいあるし　草を花の宣旨中　秘日興あるよし
メイワウ
シシダイ
いらのよかりい　河巨にホし
明王の川世臣代　草秘河海にくりしく侍る但洪指流

芙ノ女世
クモキ女朱

のうへまて為ゑ〻てんぢく年間つゝ猛なるもてんぢく
代のゑすゑかゝ〻ゑ〻ゑ〻ゑ〻ゑ〻

第 河周ノ末武成康ニ模スト云ヘリ本朝ニ於テハ陽成
光孝 宇多 醍醐 自信公 元慶四年 誕生 長
ニ干時左大臣ハ左准拠ニ見ヘタリ平天
自信公ハ延長八九廿二朱雀院受禅ノ日家園白記
ニ入ル湊標ニ云ハ故の号ヲ云ヘリ延喜代
内裏ノ臣ヲ家園白号シ
読集仁ヲ雀ヲ弦ハ寿和 仁明 文徳 清和
又ハ為ヲ花ヲ
第 河景近 今ハ景近ハ天武ノ故実ヲ云ヘリ
今の文ノ乃景近の二字ヲ歌近ト天武ノ故実ヲ
くもるを云ヘリ
きりの人よりつるやうとてつるも用ゐ
是推家ノ云ヘリ景近ハ歌近ヲ云ヘリ

みゝ〻ゝの賢者をとるんよなれをんゐをすゝ
大ゝんれるくきゝ刻しんとやゝゝゝゝゝ
寺
ゆあゝゝ詩をしたゝるゆをしゝ詩し
秘
詩ゝをほゝゝゝ勝を作し
第 秘日本紀天武紀下十一年八月 美末景近 行能
第 日日本紀ニ云ヘリ勝
ゝゝゝゝゝ
花
今ノ文ニ景近ノ二字ヲ歌近ト天人ノ行能ノ勝ヲ云ヘリ
みゝゝゝの拍のよゝ 秘原のゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ 秘別勅弾ハ将ノ人し第
第 日花宴ノ夜上ノ舞ハ蓬近のゆをれを形て
ゝんのゝゝゝゝ
以中れるゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

折ふしむかしの人も出はべりぬ物の中よりとりたて
て侍出侍へるとし 第四日 折字 私スルト侍ス
格
そうう八折字ふしむかしの人もいとなつかしう物のとりもてまさぐり給
て侍るを物の中より物のとりもてまさぐり給
第四そう八折カ久ニ年し略形ハ八字書
何
かほやうをかしむしりのしをとりて折しを
ひとりなる物ゝ女ゝ日やけをしをしる給
ふ物ゝくなるとりの羽しを
御花花うん 第四御衣を折ふしまれ八面目の
和
乃中将の舞のとほのと農美
海てゆくゆくまうり
花
ものをゆるゝのを出侍ふる袖をとをとを
侍ふをしう八ゆるゝ侍ふ代の例とぬねへ
きとりのを袖
さて左大臣の舞侍ふ八ゆるゝ世の冒
第つとたけの例ふるゆるのをし

格
ふるこれとかうゝ舞出ぬへきとをとをとりてふる世のをし
侍の出ぬのの代のめいゝくなるを宮ゝを
第四世大臣出侍ふをきふる事念ゝをとものをし一ふの
何
出侍なゝ八二月の光をなるゝきとし 日次ハ
とゝをあれ永し昔八男らさゝあゝ叶をきふ地と
和
世舞の第四寅を出侍へゝしとをとを侍
ゝをを侍をゝれふをとをとをゝ
あゝ源氏君舞侍ふをゝ左大臣のお侍ふをしを八
ゝ袖ひとをれをゝ侍ふとをとを袖ふて
ふるゝみゝ左の例ふをゝをゝをゝをゝ
あれを出侍ふをゝ左出侍ふをゝ
侍のをゝ舞ゝを立おゝ侍ふをとを第系出八
ゝく侍ふをすゝを延ゝ第系出八
今日を使宮常陸大臣宮真左大臣 有 正氏系
王
左大臣不来のゝ
侍をゝれをゝ

弁中将まけ　業格友人に奏上兄弟の弁の中将は
からんりせられつかしけく
からんのまへせられことうして
弁中将ハ右大臣の息也式部卿中将弁とも両人あり
かの有明の君　勝月夜の心
まへすハ卯月もうと
業格ハ君勝て東宮に奏せ給ふ申まてよ来月と跡
おほしみられけると勝乃句
おとら姉あり　業格源し
いけさもしとつく　きこゆるとつくいつぬつし
格し給ひねあらり　業格弘徽殿の方し
やらいの女御右大臣家むすめの花より業平中宮文
同弓結　踏歌後宴弓結し
延長七年二月廿七日御記云踏歌所奉仕踏歌後宴
御射場中務卿親王右大臣以下侍臣又右殿上に見物ら
右京書別如例御賭物自下賜

踏歌後宴に弓をいてありし一帰宴をこれまさあれ
え花花の時分の宴なれハかくのことくならし続き
業曰恩子ハ踏歌の後宴に弓結ありけれハ左やけ
ゆるされんにてさに記らる枝をし其結に夜宴をする
事なり
業関弓と射する結気もなれやの事にてしあけ
まれんに　旧記云結ハ出ゆるく射られし
承七年右大臣の事まて踏弓後宴まし私く宴例
考へしともあり

やうて夜ひさし様

行 飛香舎藤花宴有興　延長二年三月廿日左大臣 飛香舎藤花下有献物之九

うつかの地位にて三月十日ホトハかりに藤つほに夜の花乃於

しつ侍り

おかはやけゆみなりくへうく太政大臣の亭にて夜更の宴

又天暦三年四月十二日飛香舎藤花宴にハ和歌

管絃とあり

むかしハ色をまつると採しなんへられ盛ハ色まつるし

弥のちりなんとやそしつれなりん

古今に弥の我なるほうさりましとよめるハ色をよいひ

そしへうるんなれハ亭のさ遊より申まりそしんときう

うかくのとくうけるし古へお水ての亭ハかはけくハ此我流り

守うとみて侍りいと夜らいさむる守りにかまちのさき

うる守佐ゆる自しなしとよあるハ本亭のやし見かくいさと

いつるハやもといさあうんなれとやそくろそと知らく

いさむる守とよみ侍るしうる此個よれ似つる気ある

よきもつね申見むと客の此よより侍るし太政源氏

なとと一見よるハ亭見よるよ御んつあしよまんよう

て本亭なむ流と月へうやしとこうけしてハつるとえい

様へ侍れハいとさいなうさい人のつあまとうるし能侍るし

篝目みまへもしなうさい此星此採むよの我なるん作なさ

ゆましと云ハむよいひ我へるりしと云まてとうんへてき

宮求て侍弥らてうむる守りよし　やれくうしそと

ようつてよあるうんなれハめ此見るし此亭知れやよ我

我なるんの詞亭るとまむとれやしいもと花ことと篝

西自さお亭らへたての本亭ほうさう御しとをくへ

ふうくとよて古うう詞へむをまみてうつ　年日

紅れやしむ縁妙のうとうんとむへし

梓

佐く佐つう度

篝河梓　弘徽殿此は後の文遣し

文書まらの川りず

源の姉妹し

平
弘徽殿乃御腹の女御にて後堀川院の后に立給ふ左大臣の家よりいでまし
給ふ御すゑの人々あまた出来給ふ太政大臣に成給ふ
うちつゞきめでたくいさかえ給ふ人のおほくおはしませし
この家の大臣を西園寺と申し 左大臣に成給ふ
かの御はゆかしとおほえ給ふ 右大臣の内室にて対面の御事
ありしとあるよし申しつたへたり

　入道前太政大臣

花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものは我身なりけり

　権中納言定家　京極中納言と号す　俊成卿の子

ふりゆくとは世のうつりゆくを云ふ花の庭に散りしくを雪とみなして嵐のさそふ花の雪ならで我身のふりゆく事をなげき給へる心なり
此歌は西園寺の庭の花を見て読給へるよし申したへたり

ふりゆくものは我身なりけりと云ふにて花をさそふ嵐の庭の雪のふりゆくとかけていへり
西園寺は栄華のさかりに成給ひて我身のおとろへをなげくはよのつねの人の心なりと云ふ
花のさかりをみてわが身のふりゆく事を思ひ給ふ心ふかし
此歌の心は老の後の事にて世の中の移りかはる事をおもひ給へるなり
人の世にある程の栄花もつゐにはおとろへぬる事をおもひしりたる心なり
後の事をおもひやりて世の中のはかなき事をおもふ
それを思へば我身も花のごとくふりゆくものなりと云へり
我がやどの花はちりても又春はさくものなれども人の身は一たびおいぬれば又わかくなる事なしと云ふ心なり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

唐装束とく差するもあり
と唐の袴用るし袴のうへ
のうへのうへのうへ面白さ
直衣布袴 例ありまさ略

常の袍は指貫ふく袴をしたは布袴とそうし
直衣布袴と云おもらし直衣より下袴ってもとり
第百 西大臣上扇大臣衣下袴陪従不常
と兼ちうは裙帯袴の衣のすうとよ袍より袴とう
ぬるとは布袴とてはと下用うまし直衣布袴は依時
依人まし常は九朝式 準常ていつ晴ぬて
若時 清野大力
みな人はうへのうへ 第百 若は袍をきうし袍とは常
の裳束しそしと袍とて袍とうとうとうとうとう
あうれうう表ようう

第百 たうれ見ぬ袴しも行幸とてもなうう大さ
みぬとあう袍はあうれうもうれうんうう常
の袍は指貫うて裙を引は常まし直衣は裙とり
ま普色なうて志とうれうすうあ
あうれうはうれうとうんうふうう
はうれうし大人のすうれうとうんうふうう 若大臣
又直衣すうと則大臣 河系 第三十の巻
私云 第百 不用 第三の巻
中くとぶ 秘 第百 の巻
第百の袍は袍はうしくれううしとうとうて
見うくうくうくうはしい中くはうしうう
袍のうはとうめうしうはうとあうはいうはうつうう中
たしなやうる 秘 第百 巻
女一宮女宮 第百 女一宮巻より一宮宮とり
三条殿院 殿院 立所上二人弘徽殿院
うはうはつ 殿院のうへをきし院とあ

八橋八ツ橋いつまでも
袖ふりうて　花宗花地河内の大饗し　女房
の袖口とくとくと　ふれ　ふれ　ふれ　ふれ　ふれ　ふれ　ふれ　ふれ
ふれ　ふれ　ふれ　ふれ

秘 山殿のあるじ海を古し京にきわまりしうねとし
寄 庶女の五てうもうあまをなる人の男ことうけり
けりとあるまをしき 秘 山殿の際月夜のもの
こうてをしあるくよ和歌とのめるくいつれの男と
たるくへこうてはなるれ毎と云何
扇とうしかくうきめとうあ
業俊馬京石川てしのこ海ことよ者とうれく
こ扇とうしうへ拾はどうあさをんのうし
伊古云賀氏の名おくし昔云羅人の位る家を
ど 源氏東扇のめるとうんうてうれ拾へ
扇のあるしいやうてんはうきれし 扇花ようう
う海うへうる 秘 うるうて而扇のまと知ぬ人なる
業者と扇とうて重不憂もる人まを而おはうぬ
人うとし 秘 うう海へうるとい者と扇とうしうる
を云
ど いとれをうぬ人は源氏東のうやわゆり拾へうと

うるうこ海うへうるこ海へうるとうあうるも
しうはせうく 業六東しは山人と形のあ皆
ど 扇とうしるる人はうやゆとうるけくをはうしの
よあうるうるし 源はいしまるるとうる拾てうれ
人のかうるうるうるうこ海へうるみを行し
ほ 樟うる人さのうるうまるるおのうる月れてけやみるを
秘 うの結るしは緑あり 河側見月
業うう結しう孫あり
ど うの結の日見をは樟うる人されうるはいてうるのみし
月はを明の彩のうるうるよの戸口をうるをうるん
何かるを 秘 何かるよまるをふるを
えをれをねぬて 秘 うるうはうるは海の家をうる拾て際の
うるうくえうるのしは拾うあうし
業日東を光く際のをうるねんとりをあうるを
ど 仏りるうるうまをはうるうの月れを京よまるの家
河天文一六月曲一六月直若張うを

比はやしの中にあるもの
比しまうとしてはかなよりあるとほの
今の中はる文字よりかくうつりみるもの
松
あるくなくなくなるかなるとしまふさもと
花の今のまとかとしてのようにうるを今
今後し五日因古はは中の文字ようにうるとあ
やしかの事はるもの中に抜し面白し
第日古実人よりるかなるふまとを第ふをまき
ほのまとふかとるとあるとまとまとうれ
京則えんうとし比はかあまりト伝の月し
きうとしなり
第 松ひとはそのをなさしうあ(れば人と
ろうとうきはう
も第のをとはいしとやうとしを人のをとはかる
ひうとうきはうの伝伝ひうるきなをう
ひうとうはるはれもいまるとの是とはうし

うたとうねんとあるとまるせうう
第日花に第の京是をうとうれ無い是よ
やうしうるうるうるうるねんに花院うと
きしてし比拙流流より拙流の眼し保氏のんよあく
うれるを明のひ来を見ねうきんうれいけを
人はうとうよ云ひるはなうはけ
女の男はるとはるうるうるうるうるはは
くはるはるはる

[illegible]と云へるやを豊[illegible]
関去[illegible]行[illegible]なれ[illegible]くしきとし筆関ハ
[illegible]さて筆関[illegible]青紙の表
[illegible]東[illegible]明[illegible]
[illegible]る[illegible]時[illegible]くしきの[illegible]師流を
[illegible]行[illegible]なれ[illegible]くしきの正流[illegible]花[illegible]家
[illegible]明[illegible]行[illegible]弄[illegible]筆[illegible]ハ
[illegible]流[illegible]能[illegible]と面白[illegible]
筆[illegible]氏[illegible]の中[illegible]
[illegible]百[illegible]筆[illegible]業[illegible]
[illegible]勝の[illegible]の家の[illegible]